REPORT 1

特定非営利活動法人

サポートハウス年輪

地域の“生活者”として考える

（長寿社会福祉基金　特別分　平成15年度）

DATA
〒188-0011　東京都西東京市田無町5-4-8
第一和光ビル1階
TEL　042-466-2216　FAX　042-451-6071
http://www.npo-fukushi.com/

24時間365日の訪問介護。今でこそ実施する事業者もみられるようになりましたが、「サポートハウス年輪」は実に16年も前から実施しています。〝最後まで住み慣れた地域で暮らしたい〟、おそらく誰もが抱えるその想いをかなえるため、まさに最前線を歩んできたその取り組みを伺いました。

鬼は外、福は内

書道

1 バウムクーヘン

「サポートハウス年輪」の前身は、女性問題をテーマに活動を続けていた「バウムクーヘン」というグループにさかのぼります。「バウムクーヘン」の結成は1979（昭和54）年。さまざまな年代の女性が集まり、学習会の開催などの活動に取り組んでいましたが、1985（昭和60）年以降次第に高齢者福祉に焦点をあてるようになります。それはメンバーの女性たちにとって自身の〝親の介護〟が身近になってきたからでもあります。やがて1993（平成5）年に老人保健福祉計画が策定されることを知ったのをきっかけに、田無の福祉を考える勉強会を開催。そこで田無市（当時）の担当者を招き、話を聞きましたが、これが「年輪」を誕生させる直接的な契機となります。老人保健福祉計画は地域住民の参加による策定が求められています。当時としては画期的といえますが、その担当者は市民の意見は聞かない、調査をすることもないというのです。行政は当てにならないと考えたメンバーは、他のグループとともに田無に暮らす一人暮らしの高齢者500人を訪ね、自分たちで調査をはじめます。調査結果をもとに市長や議会に要望を出すなどして、老人保健福祉計画は当初よりはよいものになりました。

しかし、その計画が実現するには長い時間が必要です。調査をするなかで出会った高齢者の顔を思い浮かべるにつけ、私たちにもできることがあるのでは、と考えたメンバーたちはその結果から、介護と食事があれば自宅で何とか暮らせるのではないかと感じていました。そして、1人10万円ずつ出し合ってアパートを借り、時間と曜日に制限のない24時間365日のホームヘルプサービスと夕食の配食サービスをはじめることになります。〝夕食〟にしたのは「夕方が寂しい」という声があったからです。こうして、1994（平成6）年に「サポートハウス年輪」が誕生しました。その背景には、調査のなかで出会った高齢者と同じ市民として自分たちが安心してこのまちで年齢を重ねることができる、そんなまちをつくりたいという想いがあります。1999（平成11）年にはNPO法人格を取得、2000（平成12）年には介護保険対応サービスを開始し、今では、訪問介護事業所、配食サービス事業のほか、居宅介護支援事業所、認知症対応型通所介護事業所2か所、認知症対応型共同生活介護事業所2か所などを運営するまでになっています。

グループホームでのひとこま―穏やかな時間です

2 バブル期の光と影

さて、ここで、「サポートハウス年輪」の理事長である安岡厚子さんの経歴について紹介します。「サポートハウス年輪」の理念を語る上で必要となるからです。

安岡さんは25歳で結婚、子育てをしながら「バウムクーヘン」に参加。そのメンバーとして活動を続けるなかで「(人の)最初(誕生)と最後(終末期)は実はとても関係しているのでは」と思うようになり、終末期に関心を抱くようになったと言います。このような想いもあって、1985(昭和60)年から7年間、特別養護老人ホーム併設のデイサービス職員として働いたそうです。その後、1993(平成5)年にスウェーデンにわたり、グループホームに出会います。そこでは、「認知症のある高齢者がこんなに穏やかに暮らすことができるのか」と思ったと言います。「認知症のある高齢者が穏やかに暮らせる仕組みを田無でもつくりたい」という想いから、帰国後、「サポートハウス年輪」を立ち上げる際、その名前に〝ハウス〟という言葉を入れたのだと教えてくれました。

ところで、1980年代の後半といえば、認知症を患った高齢者は、最終的には老人病院か精神病院にいくことが当たり前でした。そして、その時代はまさにバブル景気の真最中です。一方で老人病院でがんじがらめにされる高齢者がいて、一方で贅をつくす人がいるというその落差に、まるで自分が加害者であるかのように感じたと言います。「経済大国と言われる日本で、最期の数年間を人間らしく扱われずに高齢者は無念の涙を流して亡くなっていく」現状への憤り、「自分は縛られて最期を迎えたくない」という気持ちがあったのですと教えてくれました。

3 さりげないサポート

「サポートハウス年輪」は平成15年度に長寿社会福祉基金の助成を受け、「さりげないサポートシステムの構築事業」に取り組んでいます。グループホームの職員と認知症のある高齢者とのかかわりはどうあるべきか、入居者が穏やかに過ごせる環境やサービスはどのようなものか、訪問調査などを通じて明らかにしようとするものです。

安岡さんは、高齢者の〝生活〟を支えるというとき、「介護」という言葉は当てはまらないのではないか、と指摘します。「サポートされていることに気がつかないサポートであってこそ、高齢者が心穏やかに暮らせるのではないか」と考えていた安岡さんは、この事業を通じ、「暮らしを支えるケアのあり方が見えてきた」そうです。

屋上でお昼ごはんを―そよ風にふかれながらの食事は格別です

介護のあり方を考える際、「生活支援」という言葉が使われます。しかし、「生活支援」が具体的にどのようなものをいうのかわかりにくいと思いませんか。一人ひとり実に個性的な〝生活〟を支援するとは、具体的にどうすればよいのでしょう。「生活支援」の定義が定まっていないために、人によってそのイメージはさまざまで、共通の言語となりえていません。したがって、そのサポートの仕方も標準化されていないように思います。これを、「さりげないサポート」として明らかにすることで、その方法の標準化と、実践を通じた質の向上が可能となります。実際、この事業のなかでつくられた「自己点検シート」は東京都が行う「認知症介護実践者研修」でも利用されるようになります。

4 住民が決める

多くの市民活動にとって、その事業の継続性を確保することは大きな課題です。このようななかにあって、16年目を迎える「サポートハウス年輪」。そのポイントはどのようなものでしょう。

安岡さんは「「年輪」が田無にある、そのことがみなさんの安心材料となる、よりどころとなる、そんな

写真中央が安岡理事長

活動をしていき、発信すること。そして、さまざまな声（ニーズ）を聞き、それに対応できる柔軟性をもちながら、一年一年大切に活動を続けていかなければいけないと思っています」と教えてくれました。

また、次のようにも指摘します。「先のことは住民が決めます。「年輪」がこのまちに必要かどうかは住民が判断することです。「年輪」の活動が住民に見られているのです」。

◆　◆　◆　◆　◆

「当事者性」とは市民活動にとって大切なキーワードです。「サポートハウス年輪」の原点は「バウムクーヘン」時代に実施した高齢者への聞き取り調査にあります。まさに当事者である高齢者が抱える悩みや困難、課題を把握すること、高齢者の立場になってその解決策を考えていくことが大切なのでしょう。これは、行政との関係性を考える際にも参考になります。「委託だけではダメ。旬の情報、市民のニーズを常に把握して、行政にそのニーズに沿ったサービスはどのようなものがよいか提案できてこそNPO。すると行政の方から相談してくるようになります」とは安岡さんの言葉です。

5 「年輪」の課題

一方で、長い年月を重ねてきた「サポートハウス年輪」だからこその課題もあるようです。

事業規模が大きくなり、設立当初の職員が少なくなるにつれ、「年輪」が掲げるものとは異なるようなことを言う職員が出てきたと言います。たとえば、2か所鍵がないと夜勤ができませんと言うなど…。高齢者の自由を奪わない、それは安岡さんにとってどうしても譲ることのできない一線です。その理念や社会の変革を目指して活動する「サポートハウス年輪」に共感して働きたいというのではなく、数多くある〝就職先〟の一つでしかないのです。

こういった状況下で理念などをどのように継承していくのか。研修で、「サポートハウス年輪」設立時の話をしたり、当時の取材ビデオを見せたりと工夫を凝らしているそうですが、「今後の課題でもあります」と安岡さん。そして、「自分や家族が認知症を患うことになったら、障害を抱えるようになったらと、相手の立場になってイマジネーションを働かせることが必要だと思います」と続けてくれました。

6 当事者として考える

そして、安岡さんは次のように続けます。

「NPO活動は社会変革運動だと思っています。介護が必要となったとき、どんなケアを受けて生活したいのか、最期はどのように暮らしたいのか、そのために福祉や社会はこうなってほしいと、声を上げることが大切です」。

おそらく、これこそが安岡さんのエネルギーの源泉なのでしょう。社会や地域の課題を自分のこととらえ、当事者としてその解決策を探っていくことがもっとも大切にすべきことなのです。

「高齢になっても自分らしく安心して暮らせるまち」を実現したいと走り続けた安岡さん。「私たちの理念が実現できれば、「年輪」をやめてもいいと思っているんです。でも、まだまだ時間がかかりそうですね」。

◆　◆　◆　◆　◆

安岡さんのお話は、地域における豊かな福祉社会の実現に向けて大切なことを教えてくれました。

そして、「自分らしく安心して暮らせるまち」づくり。それは、実は私たち一人ひとりが〝当事者〟です。その実現は、他人に任せることではなく、私たち一人ひとりが地域を構成する一員として向き合うべき課題なのかもしれません。